

ほととぎす 不如帰・ナミコ・雨のブルース

松永緑弥

私は20数年前、ふとした機縁でブルガリア語を独学で学びはじめ、今ではブルガリアの小説の翻訳も長短あわせて10編を越えるにいたったが、その間に知らず知らず、日本とブルガリア両国間の交流のエピソードをいくつか知るようになった。たとえば、ブルガリアの地をはじめて踏んだ日本人のことである。露土戦争たけなわの1877年（明治10年）、山沢静吾という陸軍少佐が観戦武官としてブルガリアの地でロシア軍と行動をとともにした。ある戦闘でロシア軍がトルコ軍に圧倒されかけたとき、彼は自ら一隊の長となって奮戦し、戦況を逆転、この功績によりロシア皇帝から勲章を授与されたのである。

前NHK会長の前田義徳氏と静香^{シカ}夫人のエピソードも有名だ。かつて年若き新聞記者だった前田氏が、ある冬、イタリアからトルコに向かおうとしてブルガリアを通過中、大雪のため列車がブルガリア第2の都市プロヴディフ近くでとまってしまった。前田氏は偶然知りあったブルガリア人青年将校の家に招かれた。血気盛んだった2人は徹談しているうちにすっかり意気投合してしまい、列車が動くようになっても前田氏は青年将校の家に居つづけ、その間に青年将校の妹さんと彼との間に恋が芽生えた。前田氏夫妻こそ、日本人とブルガリア人との国際結婚第1号である。といったふうなエピソード

ードを私はいくつか知るにいたったが、特に文化交流のエピソードの1つとして、^{ほととぎす}不如帰・ナミコ・雨のブルースのことをここに紹介したいと思う。

衆知のように『^{ほととぎす}不如帰』は1898年（明治31年）から翌年にかけて「国民新聞」に連載され、1900年（明治33年）に民友社から単行本として出た徳富蘆花の小説だが、この小説は塩谷栄によって『ナミコ』の題名で英訳され、ボストンのハーバード・ターナー社から1904年（明治37年）に出版された。

小説は英語からさらにポーランド、フランス、ドイツの各国語に重訳され、1906年（明治39年）には仏訳からブルガリア語へやはり『ナミコ』の題名で重々訳されて、ブルガリア人たちの人気をさらった。これはもちろん『^{ほととぎす}不如帰』そのものの文学的価値が買われたことは言うまでもないが、しかし次のような事情も一役買っているように思われる。

その事情とは、1906年、蘆花がブルガリアを訪れたということである。彼は同年4月、尊敬するトルストイ翁をヤースナヤ・ポリャーナに訪れるべく横浜港を出航、インド洋、スエズ運河を経由してパレスチナを巡礼した後、当時のトルコの首都イスタンブールに着いたが、予定していた黒海を渡ってのオデッサからのロシア入りは日程の都合で断念せざるをえなくなり、ブルガリア、ルーマニア経由で陸路ロシアに入ることとなった。この間の経緯は彼が帰国後書いた旅行記『順礼紀行』にくわしく語られているが、ここにその一節を引用してみたい。「…この汽車に日本人乗れりという事いつとな

く知れて、余の旅券は車中の人の手より手に渡り、あるいはトルコ語、あるいはブルガリア語（ロシア語と同系のスラヴ語）あるいはドイツ語にて答を得せず話しかけられ、停車場ごとに日本人見物の群衆は余の窓前にさながら山をなす。元来日本人の足跡あまり多からぬこの地方、おのれらをいじめしトルコをいじめしそのロシアに勝ちたる日本人とはいかなる人間かといとどしく好奇心のつづけるなるべし。力の歎美はいずこも同じ事なり。馬鹿々々しくもあり気恥ずかしくもあり、窓の蔭に小さくなりおれば、窓の外にてしきりに東郷々々と呼びだす。東郷は日本人の代名詞となれるなり…〔ソフィアでルーマニア行きの〕汽車を待つ間…逸早く新聞記者の訪ひくる者2組…」 こうしてその頃のブルガリアではトローゴは日本男性の、ナミコは日本女性の代名詞となった。

それから30余年の星霜が移り、ドイツと政治的につながっていたブルガリアと日本は、1939年（昭和14年）、相互に相手国に公使館を設置することを決定し、同十二月に蜂谷輝雄氏が初代公使として着任、1941年（昭和16年）にはブルガリアは日独伊3国条約に加盟することを決定して枢軸国となった。

蜂谷公使は大の音楽好きで、当時日本では戦意高揚にそむくとして発売中止になった淡谷のり子の『雨のブルース』のレコードをブルガリアへ持参した。この歌がむこうのラジオを通じて放送されるや異常な人気を呼び、若い男女の愛を歌ったブルガリア語の歌詞をつけて『ナミコ』として新しく誕

生、レコードも売り出されて大ヒットした。現在でも五十歳以上のブルガリア人はみなこの歌をよく知っているし、たのめば喜んで歌ってくれる。この『ナミコ』—『雨のブルース』の件はしばらく前にわが国でも話題を呼んで、淡谷のり子自らブルガリアへ出かけて行って歌い、大好評を博した。そして彼女の帰国後、このことがテレビで取り上げられ、彼女がテレビ出演するというその前日、当の蜂谷氏が永眠されるというまことに劇的で悲しいおちまでつく仕儀となった。

「ここは速きブルガリア、ドナウのかなた…」と歌われるかの国のわが国との関係は、このような奇しきエピソードをいくつか秘めつつ、今日、政治、経済、文化の各面で急速に進展しつつあるのである。

筆者略歴

昭和4年、東京に生まれる。

昭和28年、東京大学経済学部卒業。

現在、沼津商業高校定時制につとめるかたわら、ブルガリア文学の翻訳に従事。